

て下さる。

参拝後は護国神社近くの会場にて、各中隊別に昔話に花を咲かせ、また来年の再会を約している。

軍隊生活の思い出

埼玉県 稲垣吉夫

現役兵として昭和十八（一九四三）年二月一日、連隊砲員として近衛歩兵第三連隊（六本木にあった）に入営する。北支派遣要員となり、同年二月八日品川出発、東海道線を下り、京都等の主要都市駅では国防婦人会の方々に「御苦勞様、元氣で行ってらっしゃい」等の御見送りを受け、瀬戸内海を左に見て、広島厳島神社の海中に建つ鳥居を眺めながら下関に着き、直ちに乗船、釜山港へ向かう。夜となつて冬の寒さを感じる。海は荒れて酔うが教時間で釜山港へ上陸、今度は列車で朝鮮半島を縦断する。

京城（ソウル）は夜中の通過、ストロブ列車は二重

窓でも寒い。真冬の夜中では仕方ない。満州へ入ったらなおさら寒いことと思う。特別列車でも速度は遅いが、あまり停車は無い。奉天（瀋陽）そして山海関は昼間の通過で、万里の長城は山の頂上付近で遠望出来た。なおも走って、天津、濟南、泰安、大紋口と進み兗州へ到着する。ここは歩兵第三十二師団本部の在所で、赤れんがの立派な建物の兵舎が並ぶ。ここで一泊し、翌日は師団長も出席、軍旗も参加して入隊式が厳かに開かれた。再び列車で鄒県、両下店、界河、勝県、臨城を経て棗莊へ着く。ここでまた泊まり、国防婦人会の歓迎を受け、ごちそうにあり付く。

明日はいよいよ山奥の警備地へ向かつてトラック輸送。車上での寒さは厳しく、外景を眺める気にもなれない。一日がかりで撻県、蘭陵鎮、下庄、博家荘を通過して第二百十連隊本部のある沂州である。早速、連隊長小池大佐の訓示を受け各々の中隊に分かれ、自分の中隊へ行く。歩兵砲中隊の渡辺隊は歩いて十分ぐらいの所にある。渡辺隊長はどこかへ出張とかで、隊長

代理増本中尉の言葉を聞き、今日から兵隊さんになった気がする。

すでに班の編成が出来ており、各班二十人ずつで、第一班長・辻軍曹、第二班長・梶原軍曹で、それに各班に教育助手が付く。こうして何も知らない軍隊生活は始まり、一から十まで教えてくれる。小生は梶原軍曹の教育班だ、明日から砲訓練が開始となる。朝の点呼が終わると重さ八キロの弾薬箱を十五回、差し上げないと班に戻れない。各自必死に努力する毎日である。

四一式山砲（通称「連隊砲」と言う）には十二人の砲手が付いて砲操作をし、交替で教わる。一、二、三、四番の砲手が揃ってはじめて砲を撃つことが出来る。すなわち一番が弾丸込め、二番が方向を定め、三番が発射、四番が照準で、これで班長の号令で一発撃てる訳で大変である。訓練するうちに相手の能力も分かるようになって、砲隊の兵隊は砲手にならないと駄目だと思ふ。何が何でも砲手になりたい。一期の検閲では四番、三番に座りたいと思っていた。

そんなある日、中隊全員と初年兵も加えて、砲側の射撃照準競技大会が営庭で開かれ、小生思いもかけず、四十人中一位で優勝して賞状と副賞に煙草二〇個をもらう。嬉しかった。この時は、最高だ。そんなこともあり、成績も上昇したのか検閲では砲手の三、四番に座れた。

一期の教育が終了し、人事係の准尉さんに勧められて下士官候補教育隊へ進むことを承知したが、入隊してみると教育は小銃教育ばかりで、砲隊出身者はお呼びでなく最低の成績だと思った。だから班長や助手に痛めつけられ悩んだ。考えてみれば、当たり前の結果だ。砲教育中には全々触れない軽機関銃や、擲弾筒の分解、結合等で、出来る訳が無いのだった。砲隊員は三八小銃すら持たないのだから。

二年兵になった頃「楓」師団は南方へ転職命令が出て、昭和二十年四月二十六日未明、パシー海峡で米潜水艦の魚雷攻撃を受け、小池連隊長以下二千五百余人海没する。その頃小生は病氣にて入院中のため難を逃

れた。そして「幹」部隊へ転属となる。「楓」と比べ兵力が落ちたので、分遣隊やら行動中の連絡兵は攻撃され、そのため討伐に出動が多くなった。

二年兵の上等兵は山形出身の大瀧と熊坂そして小生の三人、あとは皆一等兵で、三年兵の一等兵もあり、われわれの行動は注目された。そんな中隊で観測教育を受けるよう選ばれ、乙幹の伍長たちを含め六人だが観測教育が始まる。班長・島根伍長（十五年次）、比志岐兵長（十六年次）に初めて一から十まで、手取りで習うこととなる。歩兵砲中隊では、まず砲手になること、そして観測班教育を受け観測手になれば最高位だ。数カ月の教育でトップの成績だと思った。厳しい中にも楽しく教わった。乙幹の伍長等には負けられない。教育終了後は観測班で作戦に参加する。

折しも昭和十九年十一月一日、沂州を発ち費県、太平邑、曲阜と進む、いわゆる「十九秋山東作戦」で、これに加わる。費県には一日で着く。観測手として初めての機材を持って島根観測班長と行動を共にする。何か不安だったが班長の指示通り動けば良い。この付

近で日本軍の作戦と云えば、敵を発見すれば、まず連隊砲を撃って威嚇し敵を散らす。散兵さんはそれから徐々に攻撃となる。小銃隊は道端で「観測さん頼むよ」といつも言われる。機材を背負い前線に進んで敵状を探る。一番嬉しい。誰もが注目し頼りにしてくれる時である。自分で距離を測定し砲に連絡、砲手は照準を定め発射となる。命中すれば大変に嬉しいものだ。

今度の作戦は、費県南部に勢力を持った国民政府軍新編第十軍栄子恒軍が八路军第百十五師教導第二族の猛攻を受け、警備地を曲阜に移動することとなり、この転出作戦に在沂州の松岡大隊が協力すべき命令が下ったようだ。

— 幹一九三六部隊第四中隊小林隊の小隊長で、鈴木忠一少尉の『厚い戦塵』参照 —

将系栄子恒將軍率いる三万人とも伝えられ、もちろん、家族も含めてと思うが、我軍と同じ行動の大移動だった。このような情況は兵隊には聞かされず、栄子

恒將軍一族を守って曲阜まで送れるか分からない。松岡部隊長は費県まで行動を共にするが、あとを幸道大尉に頼んで沂州へ戻った（後日聞いた話）。十一月三日、今日は明治節で、中隊にいれば紅白の大福餅や赤飯が出て祝うが、討伐中ではこれは不可能であきらめるしかない。

榮子恒將軍は立派な中国人で、さすが大人の風貌があり、家族は街で見掛ける農民の姿と何ら変わらないう。沂州から西ルートで費県へ（沂州から四十キロ）、そして銅石まで（費県から十キロ）、その先大平邑、泗水、曲阜へと続く。八路军軍にとっては好条件の攻撃目標で攻撃の機を伺っていたようだ。十一月三日昼、大平邑の手前の右手の部落から急襲を受けた、その時連砲は、繫架編成中で馬一頭で砲を引っ張っていた。激しく撃ち合いが始まった。連砲は道路右側の溝に移したが敵側部落から丸見えなので、馬を解いて左側土塀の陰に入り直す、五二七・五キロの重量物で移動が大変だ。

わが観測班は島根班長の命により速やかに観測体形

をとる。部落からしきりに撃ってくるが砲の方には飛んで来ないで助かった。しばらくの撃ち合いのあとは静かになって嘘のようだ。また体勢を整え太平邑へ向かう。ここは初めて来た分遣隊で、泊まった翌朝は天気も良く泗水へ向かう。

兗州からの連絡部隊がこの辺で落ち合うらしいが兵隊には分からない。道なき畑の中を進む。延々と畑が続く。進行右側はあまり高い台地でなく、左側も遠くに（千メートル位）離れて山波が続く。その中間が畑で、そこを進んで行く。日本軍は少なく攻撃すれば戦果はありそう。昼も過ぎた頃、尖兵小隊が待ち伏せを食って八路军に攻撃され、戦闘開始。わが砲隊も戦闘体勢に入るが畑の中で隠れる場所がなく、迫撃砲弾も頭の上を飛んで来るので、砲位置は敵に知れたのかと速やかに移動させた。

尖兵小隊は戦死者が出て、戸板に乗せられて本隊の位置まで戻って来る。保安隊を含め三人ぐらい戦死の様子。左側の壕中にも敵さんがいる。ほうたい鏡で良く分かるので今まで右を撃っていた砲を反転させて左

側（千メートル位）の壕中を撃つと見事命中し砂煙が舞う。思わず「やった！」と叫ぶ。自分が距離を出して砲手が第一発の試射で目標に当れば最高の気分だ。敵が三方にいたので砲隊は忙しい。小銃隊はちょっとお休みして敵と対峙するのみ。砲隊だけ忙しく左を撃つたり右を撃つたり、砲一門では骨が折れる。

この辺で宛州からの兵隊と落ち合う手筈らしいが、その連絡隊もどこかで敵と交戦しているらしく迎えも来ない。榮子恒將軍は多勢で様子を見てる。前進も後退もなく長い時間が過ぎる。二時間、三時間と時間は過ぎるだけ。幸道大尉のことだから他の部隊と無線交信していることと思う。いたずらに時は過ぎ、秋は日暮れも早いので兵隊たちはやきもきする。その頃、將校達の会議が終わって太平邑へ引き返すことになり、ばらばらと戻り始めると、戦況が変わって八路軍が攻撃開始し、盛んに撃って来る。三方包囲されて畑の中で逃げるばかりである。八路軍は腰だめ射撃で撃って来る。畑には無数に雨垂れのような弾着があり、これ

では弾が当たらない方が不思議なくらいだ。鉄帽はかぶっているが、近い弾は頭にガンと来るので思わず鉄帽の上からなでることもあった。

連隊砲は重く北海道馬の「勝景」に積んで逃げるが、畑の中では逃げ足は遅い。観測班も中国馬に機材を積んで逃げたが「久土」と言う中国馬に弾が当たって足が遅くなった。見れば腹からぼたぼたと血が落ちていた。逃げ足は遅くなり、帯剣を抜いて尻を叩き逃げたが、だんだんと遅れるので仕方無く機材を馬から降ろして、たまたま近くにいた池田一等兵（山形出身）に手助けを頼みこれを二人で背負って行く。

小暮隊長に報告しないとイケないと思ひ砲位置まで戻って報告する。時間のロスは仕方ない。砲は「勝景」一頭で走り続けている。頼りになる。砲の回りに砲手数人が砲を守って共に走る。散兵さんは身軽でわれ先に太平邑へ逃げる。身軽でうらやましい。砲隊は一番後ろとなって、迫り来る八路軍に「勝景」を砲から放し、一発、二発と撃ってはまた急ぎ逃げる始末だった。何キロくらい逃げたかは分からないが、もの

すごい戦況で、何の命令も無いまま太平邑に戻る。悪運強くというが、あれほどの弾に当たりもせず、夕方太平邑に戻れた。

太平邑の部落へは日本軍のみ入るように部落の入り口でチェックする。栄子恒軍は門外というところで、ひと悶着あったようだが、まあまあ無事に戻れた。早速戦死者の遺体を茶毘に付す。二日、三日と過ぎ、次の出発準備もあつてか、そんな時に隊長がほうたい鏡を持って望樓へ登って来いとのこと。登って四方を見回すと部落外に敵さんが壕の中でうろちよろしており、我々が出発すれば攻撃再開かと思えた。

砲の移動は今度は駄載となる。五二七・五キロの重量の砲なのでこれを分解し馬に積むとなると日本馬五頭が必要で、そのうえ弾薬も積むから一頭に六発とすると十頭は必要だ。そのため馬糧が必要である。

砲隊の宿泊は必ず部落のチャン耐屋へ泊まる。下士官から一等兵まで堯たがから直接水筒へ詰め、半ば公認のようだった。行軍しながら焼酎を口にするので砲隊の

連中は強くなるようだ。

いよいよ三日目の夜半に出動が決まって、敵の行動も気になるが静々と行進する。前に行く馬の尻だけを頼りにするのだ。その夜は暗夜で八路軍も撃っては来ず、太平邑の撤収にも成功のようだ。しばらく歩くうちに小暮隊長は本隊を見失ったようで、一人馬に乗り、あっちへ行ったり戻ったりしばらくの間探し歩いた。やっと本隊を探し合流出来てやれやれだ。八路軍に捕まらなく幸運だった。

戦争とはいろいろな事があるようだ。時折り暗夜に洋砲（やんぼう）を撃って来るが、当たる弾丸と当たらない弾丸の聞き分けが出来るようになって来る。三年もいれば慣れる。夜が明ければほっとするが八路軍の攻撃はいつ来るか分からない。測遠機は外の温度で数字が違ってくるのか。小休止中でも点検は休むことが無かった。案の定、昼食後に左の台場から撃って来た。あまり高くはないがその距離を計り、高低差を報告すると、四番の岡本金五郎上等兵は慣れたもので、

早速応戦、第一発試射で頂上付近で炸裂して敵も退いたように、四番砲手らしく立派で観測手としては誠に気分が良い。

太平邑の戦鬪は、幹部隊の砲隊にとっては思い出に残る逃げながらの戦鬪もあって貴重な体験だった。榮子恒軍の三方の兵たちも無事曲阜へ送り作戦は終了した。

五キロくらいは追われたろうか。曲阜は孔子廟のある聖地で、八路軍もまた将系軍もすべて犯すこととはできない尊い所である。

沂州城外八路一個師団の攻撃

昭和二十年三月初旬、突然八路正規軍の大部隊（一個師団）が降って湧いたごとく、沂州南西約六キロ地点に進出して来た。初めて八路軍を迎え撃つ作戦に動した。南門と西門の間地点に集結し、わが小暮砲隊も第一線に並ぶ。昼間なこともあり敵状が良く分かる。平坦な麦畑で敵が伏せているのが見える。距離八百メートルで砲を撃つが、水平で撃てば弾が飛んでも

弾肩が地面に当たり跳弾となって炸裂しない。そのために部落の土塀等を撃って炸裂させるのだ。

向かい合つての戦鬪はあまり戦死者も出ないが、わが軍が押せば敵は逃げ、こちらが退けばまた押し来る。撃ち合いは昼間には終わり、勝ち負けのまま沂州へ引き揚げる。後退するとまた激しく撃つて来る。

後ろから頭を撃ち抜かれるという戦死者も出た。運の悪い事だ。小生は砲隊要員で一応砲手となつたり観測手となつたりして作戦に参加したが戦死もせず、まあ満足の軍隊生活だ。そして自分が教育を受けた砲知識や砲操作は後輩に伝えたいと思った。

幸い三年になり、昭和二十年正月から千葉出身の現役兵の教育を命じられた。小生は何も知らない兵隊を指導しかわいがつた。彼らが一期教育を終了するとすぐに幹部隊は日照へ移駐し、教えた初年兵とも分かれて、そのまま終戦となった。その後も彼らに逢いたいと思ひ続けたが、戦地では逢うこともなく、戦後、千葉での戦友会に呼ばれ再会でき、大変嬉しいことだった。

氣に掛かる一期の成績だが、幸いにトップから五位までわが班から選出されたようで満足している。

三年余りの軍隊生活において忘れる事が出来ない事、二つを特記する。

一つは昭和二十年八月十五日の終戦も知らず討伐に出しており、八月十八日夜中に沂州へ帰隊し終戦を知る。無条件降伏とは情け無いことだ、残留兵、邦人およびその家族すべてが発発準備完了し、討伐隊の帰りを待っていた。二時間後沂州を完全撤退と聞く。割食った討伐隊だ。今回の討伐で傳家荘から先の道が何キロにも渡り切断されてトラック輸送は出来ない。この大所帯の移動を守って棗荘まで出られるか。兵舎内には將系王洪九軍が入り、私物、官物等検索しており、靴すら探せない有様。残留者は出来るだけ荷物を持ち、背中にもいっばい重そうに背負って出発を待つ。

我々討伐隊は悪路でさんざんだったことを知っているので、最小限の身の回り品で飯は飯盒に詰め、南門の大通りに整列、もう戻れないので十分点検がなされ

出発を待つ。

話はこれより前になるが、ここ沂州は楓第三十二師団が昭和十八年末まで警備していた所で、南方へ転進したことにより、その警備は新編成の幹兵団に引き継がれ、兵力が削減されて手薄となり、このため八路軍が有利となり、出先の分遣隊はよく攻撃された。加えて昭和二十年五月には幹兵団は対米上陸に備え日照（青島の南百キロ海岸にある）へ移駐し、後は新編成の「至銳」兵団があとを守ることになった。

独立歩兵第五十八大隊で、武器も重機関銃二丁が頼りで迫撃砲二門も頼りにならない。これだけを我が銃砲隊が持って作戦に参加した。

その頃ますます兵力の減った分遣隊は八路軍の攻撃目標となり、本部要員が救援に追われ、忙がしく時は流れた。折りも折り、諸満の分遣隊は八路軍の攻撃により布施少尉以下、二十五人全員戦死した。救援に出動したが間に合わず、時に七月十八日、十九日のことである。終戦が一カ月早ければ死なずに済んだかもし

れない。我々がよく使う言葉で軍隊は「運隊」と言う。他方南坡の分遣隊撤収作戦では、夜中に沂州を出て明け方南坡に着き、朝食もせず折り返し沂州へ向かう。結局そのあと八路軍に攻撃され逃げの一手であった。昼食もなし、空腹を抱え逃げに逃げた。重機関銃二丁を持って交互に撃ちながら後退した。そのため最後尾となり、迫る八路軍に捕まりそうになった将校さんもいた。

こんな現状の中での撤退で棗荘へ出られるか不安になる。すでに三日も経っている。八路軍にはチャンスだ。大移動が始まる夜中の二時ごろか、静々と南門を出る。遠く犬の遠吠えやロバのかん高い鳴き声にも気を使いながら、第一回の小休止は傅家荘で、夜も白々明けてくる。振り向けば沂州の南大門が右手近くに見える、左奥に西門の高樓が眺められ、思い出多い沂州だが見納めとなると思うと寂しい限りであった。早くも道端には荷物が散らばっており、落伍者が始まった。歩けない兵隊は重い荷物は捨てるしかないのである。

青竹にて二回目の小休止のころは夏の真っ盛り、悪路で心身ともに疲れ果て、時折り八路軍の攻撃も重なり逃げるばかりである。わが迫撃砲を持った相川班長が砲弾を捨てようということでもクリークへ数箱捨て、いくらか身軽となる。棗荘へは普通兵隊の足で三日かかるが、この大所帯ではどうなることか。馬の背に結ばれ、動けない兵隊が増え、元気な兵が両側から支える。そして元気者の負担が重くなり他人ごとではない。悪路と八路の攻撃、暑さもありませんか参った。

下莊蘭陵鎮を過ぎ三日目、ますます地獄の行進が続く。将校の軍刀も捨てられている。大隊長の行李二個は馬の背に振り分けられ当番兵が守っているの、この行李を捨てさせ、落伍者を乗せた。人の命の方が大事なことだが、大隊長は隴原の手前で「歩けない兵は一個所に集め、他の者は前へ進むように」とのことだった。各隊の将校は残った。残された兵隊はかなりおり、そのころは他人どころではなく、自分を守るだけでいっばいだ。ちょっと気に掛かった。その後、落伍者が元気になり中隊へ帰った話は聞かないので、あ

るいは名譽の戦死となったか真相を知りたいところだ。

澁県には日の高いうちに着き、兵舎の裏の川で水浴びし疲れをいやした。その夜、衛兵勤務に就くが、敵と見られる将校服の男が入って来て隊長に会わせると言つて来たが、八路軍の回し者かとも思ひお断りした。幸いにその夜は何も起きなかつた。

翌日澁県から貨車に乗せられ、棗荘は一つ先の駅なのですぐに着いた。ここで糧秣倉庫が解放され、下給品の酒、煙草等の配給を受けた。持ち切れないほどだ。早速酒盛りが始まる始末。貨車は津喃線を北上、どこへ行くことやら兵隊は何も知らされないまま臨城、勝県、界河、両下店、鄒県、兗州と行く。兗州には旅団本部がある。

戦後になり、四一式山砲（通稱連隊砲と言う）を受領し、いまだ奥地で引き揚げの出来ない所へ救援に行く。苦労はまだまだ続くが、この沂州撤退が地獄の三日間であるので、特記し、後世に伝えたい。

昭和二十一年一月、夜襲による最後の戦闘である。連隊砲を受領し各地を転々と警備（主に津喃線沿線）、昭和二十年も秋風が吹き、やがて冬となるが、夏服を着たままの山猿部隊の奥地ばかりの警備である。だが我が中隊の兵は元気だ。八路軍はチャンス到来とばかりに分遣隊へ宣伝員が毎晩のように押し掛け、八路軍へ入るよう宣伝に来る。ある中隊では中隊全部投降したり、昨日までの戦友も今は敵となり投降を呼び掛けに来る。声のする方へ重機関銃の銃口を向けバリバリと撃つ毎晩だった。

そんな中で第五中隊の警備となった。雲停信号所（兗州より北へ三つくらい先の大紋口よりちょっと北にある）へ派遣された銃砲隊だった。受領した連隊砲を撃つてないので正月四日に試射しようと決め、部落を避けて数発撃つて満足したが、寝た子を起すこととなり、一月十日夜半、寝静まったころ八路軍の夜襲を受け、激しい撃ち合いとなった。一〇〇メートルくらい離れた兵舎と馬舎が焼かれ軍馬は連れ去られた。真っ赤に燃えて辺りは昼のように明るく、八路軍がう

ろちよろするので重機関銃の斉藤班長が自ら撃ちまくる勇姿はたのもしい。二十発に一発くらい曳光弾が入っていたので弾道が良く分かった。我ら砲隊も負けではいられない。何発もの発射音と炸裂音が入り交じり夜空に響いた。

この音で大隊本部のある大紋口まで聞こえて救援に来るかと思つたが、その夜は来なかつた。我々で死守するのだった。闇夜で砲を撃つと砲口から火を吹くので、砲位置が分つてやたら敵さんが撃つて来て生きた心地もしない。小銃隊の軽機関銃は二丁とも突っ込みを起こし撃つことが出来ない。お粗末なお話。砲は少し高い所にあり、砲身を下向けにしないと駄目だが、あまり下に向けて撃つと散兵さんが前にいるので味方を撃つたら大変。照準を定めることが大変困難だ。初めて体験だったが、これが最初で最後となつた。

この激しい撃ち合いで雲停信号所を守るが、最後のころには敵の内緒話の聞こえるまで近づいて、いよいよ突撃かと思う状況となつたが、八路軍も命は惜しい

ので突撃はなかつた。終戦から六カ月も経つて戦死したら大死にだ。

やがて静かになつて戦闘は終わり、静かに夜は明けた。最後の激戦だった。戦死者は出なかつたが、軍馬は全部連れ去られたようだ。思い出に残る戦闘であつた。

戦地で敵と向かい合い戦闘し、命永らえ貴重な体験をした。反面、武運つたなく国のため散つた多くの戦友を思う時、御冥福を祈り、戦争を二度と繰り返すことのないよう永遠の平和を願う。

【筆者兵歴】

- 一 昭和十八年二月一日、連隊砲員として歩兵二百十連隊に現役兵として近衛歩兵第三連隊に入営
- 一 同年二月八日、北支派遣のため東京出発（品川駅）

- 一 同年二月十五日、山東省臨沂県沂州着、同日より同地付近の警備

- 一 同年九月三日、第一年度下士官候補者を拝命す

一 昭和十九年二月一日、陸軍上等兵を拝命す

一 同年二月二十五日、独立歩兵百九十三大隊歩兵砲に編入観測教育終了、観測手として作戦参加

一 同年八月一日―十三日、幹第三号作戦参加

一 同年八月十四日―九月二日、十九夏山東作戦参加

一 同年十一月一日―十五日、十九秋山東作戦参加

一 昭和二十年五月、歩兵第五十八大隊に転属、山東省臨沂県沂州付近の警備、命令受領で作戦に参加

一 同年八月一日、陸軍兵長を拝命し兵精勳章を受

く

一 昭和二十一年三月二十五日、内地送還のため青

島港出航

一 同年三月二十八日、佐世保港入港、善行証書付

与

一 同年同日、下士官適任証受領、現役満期除隊

初年兵教育から中支で

埼玉原 大野政勝

昭和十九（一九四四）年一月二十日、東部第六部隊（衣第五十九師団要員として）へ入隊、同日付、第五十三旅団第四十三大隊第二中隊に編入。同年二月二十五日、編成改正により独立歩兵第一旅団第九十二大隊に転属、第四中隊に編入。同年六月、濟寧北方の汶上県（我が中隊の警備地区）付近の肅正討伐に参加。

同年八月一日、陸軍一等兵。同年七月、「十九夏山東作戦」の一環として旅団作戦に参加。同年十月、両下店において嵐兵団（本隊が河南作戦に参加中のため）の初年兵（滋賀県出身）教育の助手として従事。

昭和二十年一月一日、陸軍上等兵。同年一月、濟寧の中隊において、昭和十九年徴集（東京、千葉、山梨県出身）現役兵の初年兵教育の助手。同年四月、兗州の大隊本部において、三月二十日召集の補充兵（千葉